

自著と  
その周辺

一般病棟で役立つ！  
はじめての認知症看護  
あなたの患者さんが認知症だったらどうする？  
(監著) 鷲見 幸彦

エクスナリッジ  
2014年6月刊行  
定価 1,900円  
(税別)

認知症の人は今や460万人を超え、今後の推計では10年後には700万人になると想定されている。すでに病院でまれに会う疾患ではなく、日常生活の場でも、出会う可能性が高い疾患となった。このような状況下では、あらゆる診療科の医師が日常的に認知症の人への対応をせまられることになる。

認知症の人は長い経過のなかで様々な身体合併症を併発し、入院を余儀なくされることがあるが、急性期病院が認知症の人に十分対応できているかどうかの問題があるとされてきた。これに対して厚労省は平成22年から認知症疾患医療センターの整備を開始し、平成25年から一般病院医療従事者認知症対応力向上研修を開始しているが、まだ十分な成果があがっているとはいえない状況にある。平成26年当センターの武田章敬部長が全国の認知症の人と家族の会500人に行ったアンケート調査では、急な身体疾患のために医療機関を受診した認知症の人の家族305名のうち、7名が認知症のために診療を拒否され、14名が入院を断られたと回答し、入院後には51%が「問題があった」と回答した。その問題の多くは、付

添や個室を求められた、器具や薬物で身体拘束されたというものであった。一方別の調査で、病院の立場からは、転倒転落のリスクが高い、説明してもわからないことが多い、大声などで他の患者の迷惑になるといった声がかかれた。国立長寿医療研究センターでは急性期病院で認知症の人にどのように対応するのがよいのか以下のような様々な試みを行ってきた。①病院の中に認知症対応ユニットを作る ②入院時簡易スクリーニング検査の検討 ③認知症ユニットで集積してきた看護技術の体系化 ④病院の中に認知症対応チームを作る ⑤病院のスタッフに認知症やせん妄について知ってもらう。試みはすべて成功したわけではなく、むしろ失敗の連続であったが、このなかの①、③、④から生まれてきたのが本書である。この本は病棟で認知症の人に会ったときに、どのように接して、どのように対応し、どのように感じるか、病棟看護師の貴重な経験を記録したものである。認知症の人は決して理解できない人たちではなく、すべての能力が奪われてしまっているわけでもない。むしろ保たれている能力と、失われた能力のギャップに苦しみ不安を感じているのだということを理解して接することが重要である。いうまでもないが、ここに書かれている対応法がすべてではない。認知症の人は一人ひとり違うわけで、新たに認知症の人と出会う中で、看護師たちの経験を参考にして技術を積み重ねていくことが重要であることを著者自身も教えてもらった。原文は看護師が書き、専門のライターが全体の統一が図れるようにリライトして、より読みやすくなっている。ライターも編集者も会心のできとっており、韓国語版の出版も計画されているとのことである。本来は病棟看護師さん向けの本ではあるが、他の職種の方が読まれても参考になると思う。



(国立長寿医療研究センター副院長 鷲見 幸彦)